

第 10 回 理化学研究所 運営・改革モニタリング委員会 議事概要

日 時： 平成 27 年 9 月 9 日（水） 15 時 00 分～16 時 40 分

場 所： 理化学研究所 東京連絡事務所

出席者： 【委員】 野間口有委員長、家泰弘委員、池田雅夫委員、室伏きみ子委員、
山本富夫委員

【理研】 松本紘理事長、有信睦弘理事、松本洋一郎理事、加藤重治理事、
羽入佐和子理事、石井俊輔研究政策審議役、山崎泰規研究政策審議役、
宍戸博副理事、加賀屋悟総務部長、今井博久総務部次長 他

議事概要：

(1)「研究不正再発防止をはじめとする高い規範の再生のためのアクションプラン」及び「運営・改革モニタリング委員会提言」への取組状況について

有信理事からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- ▶ 以前の委員会で、メンタルヘルスケアが重要であることを話した。職場環境が窮屈になって、心理的な負担がかかるのは良くない。研究不正を防ぐ取り組みをしていると、どうしても窮屈になり勝ち。研究者の皆さんが夢を持てるような研究所にするためには、十分なコミュニケーションをとることが大事。夢のある研究所で働いていると思ってもらえると良い。
- ▶ 成果発表のチェックのところで、大規模プロジェクトについては、難しいと思うので、どのようにされるかに注目している。
- ▶ リスク管理は、理研ほど大きな組織だと、本当に大変だと思う。
- ▶ 内部統制、リスク管理については、屋上屋を重ねず、既存の仕組みにうまく入れ込むようにするべき。内部統制推進責任者と研究倫理教育責任者の分け方等の考え方など。
- ▶ 内部統制については、おそらく理研としても、発足以来、初めて分析したのだろう。そういう点で、だいぶ進んできているという印象を持っている。
- ▶ 成果発表のチェックリストのところで、大規模プロジェクトとあるが、そもそもの STAP 問題については、どうして論文が出たかが問題だった。まずは同じようなことを防ぐのが第一。それに加えて、大規模プロジェクトの場合の問題もある。本事案を超えているが、検討してもらっているということで、良いのではないかと思う。
- ▶ PDCA サイクルの図は、よくまとまっている。ただ、これを理研の中で若い研究者に説明した時に、理研全体でよくやってくれるので、自分はやらなくてよいと思われてしまっただけではない。皆がそれぞれ PDCA サイクルを実行する。各人がそれぞれの PDCA サイクルを持っているのである。理研内で展開するときにはその旨を注意してほしい。
- ▶ E ラーニングについては、我が社も、産総研もそうだが、自前の E ラーニングを作る。なぜかという、自社で起こった事案を例に挙げることが、再発を防止するのに直接的な効果がある。簡易な E ラーニングを作るときにぜひ検討してほしい。

- 一般的な研究不正も話題になっているが、研究記録管理に関して、横浜理研で立派な取り組みをしている。産総研も参考にさせてもらったと聞いた。現場の間では結構交流があるのだなと思った。そういった共有や横展開が「過度な負担の回避」につながればよい。
- 理研のグッドプラクティスを参考にしたいと考えている。チェック機能や研究記録の保管方法等。ただ、もしチェックリストがあっても、STAP 事案は通り抜けたら。皆、「OK」でチェックしてしまっただろう。規則ではああいっただものは止められないので、個々人の意識を変えなければならない。理研の取り組みは、個々人の意識を変えることを目指している方策なので、結構だと思う。
- ガバナンスについて、元々は各センターの自立性が強かったが、STAP 事案の発生を受けて、このままではうまくないということで、色々やっているという認識。だが、理研は大きいので、完全な中央集権も難しいだろう。中央集権と各センターの自立性のバランスをどのようにするか注目している。

(2) 理研 科学力展開プランについて

加藤理事からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- 一番目につくのは人事制度の一本化。素晴らしいと思うが、理研の今の在り方からすると、相当大きく舵を切ることになるのではないかな。
- 全員テニユアにはできないので、相当スクリーニングされるはず。制度としては良いが、現場には相当なストレスになるのではないかな。
- 若手がチャレンジングな研究を行わなくなっているのは、短期的な成果を求められるため。短期的成果主義からの脱却は若手を励ますことになると思うが、どういう制度を作るにしても、どう若手を評価するかが問題。論文の数等で評価することが多いが、それだけではいけない。
- マスターコースまでは優秀な人材が育つが、ドクターへ行くときに産業界や外国に行くと思う。リスクはあるが、マスターを理研で採用し、理研からドクターコース生を大学に派遣するシステムを大学と作れないか。そうすると、身分は理研で生活の保障がされ、落ち着いて研究ができ、研究者として成功した後にはまた理研で頑張れるというようにすれば、色々な問題が解決できると思う。優秀なポスドクがマンション購入にローンも組めないのが日本の現状。自分はこの意見を色々なところで述べているが、なかなか進まないで、理研に踏み切ってほしいと思う。

(3) 理研の取組についての講評

委員より以下のような意見が出された後、委員長より講評があった。

- 今日出たように、一連の問題は構成員の倫理観の持ち方というのが大前提。しかし、モニタリングする立場としては、どういう制度を作ったか見させてもらった。STAP で

一番残念だったのは、広報。そこのチェックを上手にやってほしい。

- 科学技術ハブ機能は、大学が言っても他はついてきてくれない。理研が言えば他もついてくる。ぜひ活発にやってほしい。基礎科学も重視すると言っているので、進めてほしい。
- 人材育成にも力を入れてほしい。理研のようなところで研究できるのは若い人にとって良い経験。ここで育てられ、花開いて世界に出ていけるように。
- 一つだけ最後まで心配していたのは、内部統制が二重構造であるということ。組織全体の PDCA サイクルと現場の PDCA サイクル。だが、新たなテニュア制度を（研究所全体で）考えるということで安心した。現場の研究者の理解がないと砂上の楼閣になってしまう。良い人事制度を作ってほしい。内部統制は具体的なことなので、情報セキュリティを含めて、長い道がかかると思う。堅実に着実にお願いできれば。
- 当委員会が活動して約一年になるが、3月に提言したものについて、対応を分かりやすく説明いただいた。具体的な実施はこれからというものも何か所かあるので、引き続きしっかりやってほしい。アクションプランについては、各研究者に至るまで、並々ならぬ決意で取り組んでいると感じている。委員会提言は、これで本当に理研は回るのか、研究する余裕があるのかという声を発しながら、意見を言ったもの。その思いをまとめて提案したが、具体的に動いているというのが分かった。メンタルヘルスケアなど、アクションプランにはなかったが、研究員がいきいきやるために外してはいけないと思う。効果がどうこうというよりも、所として向き合っていると示すだけでも有効だと思うが、そこで満足せず、さらに取り組みを進めてほしい。研究記録などのグッドプラクティスも、他の研究機関が見ても、素晴らしい取り組みになっていると評価している話も聞いている。ぜひ理研の中で横展開するとともに、他の研究機関とも共有をしてほしい。
- 松本理事長のもと、高い規範が再生され、研究不正再発防止策が着々と進められていると評価したい。これから科学力展開プランの実行により、外部から羨望と期待を得られるよう期待する。

最後に、松本理事長から、有用なコメントをいただいたことに深く感謝するとともに、まだ十分でないところもあるかもしれないが、しっかりやっていきたい旨、挨拶があった。

以上